

運命の番は惹かれあうのか？

江川なつる

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

シエリルは歌手として成功していた。

それでも、ずっと満たされなかった。

ランカはずっと歌いたかった。

しかし、自分の第二の性にそれを拒まれていた。

シエリルとランカが出会ったとき、二人の運命が動き始める。

#1

乾いたクラクション。
目に毒ばかりで味気ないイルミネーション。
人はこんなにいるというのに、どこか寒々しい空気が覆っている。
はあと知らず漏れたため息は苛立ちでしかない。
くしゃやくしゃに髪をかき上げれば、少しだけ気が晴れた気がした。

#1

「シエリール、俺と遊ぼうぜ！」

——今日の俺だったら銀河の果てまで飛ばしてやるよ。

下品な笑いを顔に張り付かせた、軽薄をそのまま体現したような男がそう言つてシエリールと呼ばれた少女の肩をつかんだ。

シエリールは冗談じゃないとナイフのような笑顔を飛ばし返すと、安易に触れてきた男の手を切り離す。

時期は冬の一番賑やかな季節であり、ありとあらゆる恋人同士が浮かれる日。

仕事以外の予定が何もなかった彼女は、それでもこの男と予定を埋める気にはなれなかった。

「おあいにく様、アタシは忙しいの」

たとえ暇であつたとしても、アンタとは遊ばない。

につこりとした表情の下に見える意思は明確で、男はつまらなそうに肩をすくめる。

「さすがα様はお相手に困らないってか？」

α

聞きなれた、もつとも嫌悪する言葉。

他人はαというだけで、夢のような人生を送れると考えている。

シエリールの努力も、才能もすべては無視されてしまう。

その上、このようなセクシャルに関わる敏感な問題さえ軽視される。

まったくもって、シエリルはαに生まれたことを喜んでいなかった。

「そうね、生まれてから選ぶ側だったのは否定しないわ」

仕事も、容姿もシエリルがシエリルたる全ては彼女が自分自身で手に入れてきた。

少なくともそういう自負がある。αという生まれを除いては。

なりたい自分がいるというのに成れないというのが彼女には許せなかった。

だから、いつだって選んできた。

「一回でいいから言ってみたいセリフだな」

ヒューと軽やかな口笛を立てて、男は雑踏に消えていった。

仕事のため同じ時間を過ぎさなければならなかったとはいえ、疲労は中々のものだ。

下手に口を滑らせれば、どのような話になって返ってくるかわからない。

歌を作り、歌を歌うことで生きているシエリルには煩わしいだけの仕事だった。

とりあえず終わりには違いないと仕事が終わった旨を会社へと連絡し、その場を離れる。

気分転換をせずにはいられなかった。

*

町中の雑踏から離れ、閑静な住宅街が広がる地区へ足を進める。

人が少ないからか肌寒くはあるが、こちらの方が落ち着いた。

見慣れた住宅をいくつも飛ばしていれば、一際大きな日本家屋が現れる。

数少ない友人の自宅にシエリルは躊躇なく踏み込んだ。

「お前なあ、今日来るっているのは流石にどうなんだ？」

「うるさいわね、アルト。そういう自分はどこのよ」

長い廊下に、障子。それを開ければ畳。

見慣れた部屋に、見慣れた姿が立っていた。

やれやれと呆れた様子を隠す様子もなく、長い黒髪を一つに結んだ美しい男が言う。

歌舞伎の家に生まれ、さらにはそのセカンドバースにより人生を決められた男。

ある意味、シエリルと反対の人生を歩く人物だった。

勝手知ったる、とシエリルは衣装合わせや準備に余念がないアルトを尻目に座布団の上に座る。

目の前にはお客さん用に出されたお茶がほのかな湯気を立てていた。

何度来ても落ち着く雰囲気にはシエリルは少し心の鍵を緩める。

「仕事だよ、仕事。裏も表も忙しい」

表の仕事として、アルトは歌舞伎の女形をしている。

名門に生まれた久方ぶりのΩは“天啓”とさえ称された。

セカンドバースは職業的に偏ることがある。

芸能界に入る人間の大半はαであり、職業によるセカンドバースの偏りの代表例と言える。

アルトは生まれた瞬間に職業を決められ、Ωと分かった瞬間に夢は潰され、ここに幽閉に近い生活をしている。

それでいて女形としての才能は天下一品であり、演じている瞬間が一番幸せだという。

シエリルにしてみれば、複雑怪奇極まりない人間だ。

「今日だってこれから客が来るってーのに」

「もう、うるさい。あんまり言うならアタシが買うわよ！」

梨園に生まれたΩは、そのまま家に飼われる。

一番優秀な役者の血を受け取るためだ。

ましてや、ヒート中以外は優秀な女形とくれば、家が手放すわけもない。

一泊で大金が動く。そしてαであれば、性別も関係しない。

αとは支配者の性である。

誰かを支配したくて、したくて、誰よりも孤独になってしまう。

そういう悲しい生まれ。

「げ、やめろよ。女のαひとり発情させられないなんて屈辱でしかない」

秀麗な顔に、苦いものを飲み込んだような縦じわが寄る。

その恰好は緩やかな和服であり、脱がせやすさを考えたような形だった。

体から発せられる色気はまさに薰り立つようでシエリル以外であれば生唾を飲み込んだであろう。

Ωとは繁殖の性である。

発情期を持つているのはΩだけであるし、αはそれに引きずられるだけに過ぎない。

そして才能が有れば、発情を利用してαさえ落とせる。

「しようがないじゃない。そういう体質なんだから」

「体質……体質ねえ」

小さいころ、それこそ自分がαだとも、この世にセカンドバースがあるということも知らなかった時代。

シエリルはとても大人しい子供だった。

ちよつとしたことで、すぐに泣いたし、泣かされることが多かった。

そして、事あるごとに「寂しい、悲しい」と口にしていた。

それは今も続いている。

——寂しくて、物足りなくて、ずっと誰かを探している。

だからヒートなんて起こらないのだ。

「αのくせに、Ωのヒートに引つかからないなんて、どうなってるんだ？」

ぽりぽりと頭を掻きながら、アルトは首をかしげる。

職業柄、シエリルという存在の珍しさを誰よりも実感していた。

「知らないわよ。甘い匂いがするとか、引き寄せられるとかならあるんだけどねえ」

くんくんと鼻を動かす。

とはいえ、Ωのフェロモンは実際に匂いとして出ているわけではないので振りに過ぎない。

今だって、アルトの体から甘い匂いがしているのはわかる。

普通の α であれば襲いたくて仕方なくなるが、シエリルが感じているのは“いい匂い”程度の感情である。

女 α の発情時の特徴、男としての性器を発現させることもなかった。

「アタシだってね、アンタが相手なら大丈夫かなって、そう思っていた時期もあるのよ？」

シエリルは深々と肩を落とす。

目の前にある美しい顔を見つめる。

この顔に恋をしていた。そう思えた時期が確かにあった。

——もしかしたら。

もしかしたら、まだ α として目覚めていないだけなのかもしれない。

好きな Ω のヒートに出会えれば、この体質も治るかもしれない。

そんな淡い希望を抱けたのも、15までだった。

その年に、アルトはファーストヒートを迎え、その影響力は女形の才能と同じように天下一品だとわかった。

一番身近にいたシエリルをのぞいて、番のいない α は男女関係なく軒並み発情した。

「ふーん……やっぱり、あれなんじゃないのか？」

アルトが己のうなじを擦って、その手のひらに息をかける。

こうするとうなじから分泌されるフェロモンが空中にばらまかれ、 α は発情しやすくなる。

アルトはこれからの仕事のために用意を着々と進めていた。

シエリルは冷たい幼馴染の態度に頬をわずかに膨らませた。

「もう、結局仕事人間なんだから」

「運命の番」

え、とシエリルは言葉を詰まらせた。

アルトは我関することなく、部屋を清め、フェロモンをまき散らす。

これでまだ発情しているわけではないというのだから、この男の Ω としての才能はすごいだろう。

αを感わせ、己に落とす。

「……アンタもあの話、信じている口なのね」

運命の番。都市伝説のようなものだ。

少なくとも、番どころかヒート状態にさえなったことのないシエリルにとっては。

元々、番というのはαとΩがヒート中に、お互いのうなじを噛みあうことで発生する共存関係である。

感情に関係なく、噛めば完了する。

とはいえ、お互いに好きでなければ噛みたいという衝動に襲われることはない。

それを越えて噛む場合は、一種の契約のようなものである。

番になるメリットは幸福感の一点に収束される。

ヒート中、番と交わることは何よりの幸せをもたらす。

またΩのフェロモンが番だけに効くようになり、むやみに襲われなくなるということも挙げられる。

逆にデメリットとしては、ヒート時に番がいないと何もできなくなる。

基本的に死別以外で解消は難しく、また死別してしまうとそのまま番も亡くなってしまう時が多い。

「セカンドバースに逆らえた人間は一人もいない。それに比べたら、そっちの方が信ぴょう性があるってだけだ」

一人もな、と念を押され、シエリルは反論の言葉を飲み込んだ。

自分の特異さに色々調べた経験から、無駄足になることをわかっていたからだ。

「運命なんて信じないわ」

道は自分で切り開く。

どんなに困難で、高い壁に見えたとしても、シエリルはそうやって生きてきた。

それがよりによって一番本能的な部分で、壊されようとしている。

「それなら、アタシはその初めての人になってみせる」

恋も愛も信じているし、歌っている。

だが番という本能をシエリルは受け付けなかった。本能が選ぶ、という表現が好きになれない。

自分の好きなものくらい、自分で選択したい。

「お前は本当に昔から変わってないな」

シエリルの宣言にアルトは苦笑いをこぼす。

——運命の番。

出会った瞬間に番になるとわかる相手が世界にいる。それを運命の番と呼ぶ。

運命の番を見つけたものは、ほかの番候補に見向きもしなくなる。もちろん、Ωのヒートに引き寄せられたりすることもない。

シエリルの状態としては、これが一番近いのではないだろうかと思っていた。

けれども、その場合、シエリルはもう運命の番に出会っていることになってしまう。

「当然。アタシはシエリルよ！」

掲げられた宣言が眩しくて、アルトは目を細める。

そして、そのまま彼女にとつて非常なことを告げた。

「わかった、わかった。じゃ、本格的に客が来るみたいだから、またな」

「はあ?! ちょ、待ちなさい、アタシを……」

両脇を抱えられるように、といえは言い過ぎだが、誘導される形でアルトの部屋からシエリルが追い出される。

長い廊下の先に待っていたのは、アルトから連絡を受けて迎えに来ていた女性の姿だった。

「げ、グレイス」

「げ、とは酷い挨拶ね。わざわざ迎えに来てあげたマネージャーに向かって」

につこり笑う顔に怒りを感じて、シエリルは知らず一步後ろに引いていた。

この専属マネージャーはとても優秀であり、またシエリルの好きなように活動をさせてくれているので多大なる恩を感じている。

それでもαの彼女はΩのアルトの元へ通うことをあまりよく思っ

ていない。

商品に傷がつくことを恐れているのだ。

「アナタにはもう少し、セカンドバースの常識を教える必要がありますよね」

「え、いいわ。大丈夫、アタシ自分で散々調べたし！」

「詳しい話は車の中で聞くわ」

自動で開く扉がまるで地獄への入り口のように、シエリルには感じられた。

1 e n d

#2

ずっと、歌が好きだった。

歌っている間はすべてを忘れられて楽しかった。

その楽しみさえ、奪われるのだとしたら。

私は自分の生きる意味を失ってしまう。

#2

セカンドベース。

第二の性と言われる、それら α 、 β 、 Ω がいつの時代から区分されていたかはとても曖昧である。

人が記録を取り始めた頃には存在していたと言われている。

そして、人間以外には現れない。そう言われていた。

様々な種族との交配が始まるまでは。

「〜♪」

声を通る。今日は調子がいい。

上る朝日を見ながら、ランカは誰にも見つからないように歌っていた。

一面が緑の丘から、見えるのは果てしない青と蒼。

特に朝日が昇る瞬間にそこで歌うことを好んでいた。

種族間セカンドベース研究所。

人と混血することによってセカンドベースに様々な特徴が出てしまった人たちの研究所である。

ランカ自身、いつからこの場所にいたのかは覚えていない。

気づいたらここにおいて、毎日を過ごしていた。

検査が多い以外は特に同年代の子たちと同じように過ごしていた。

「うわ、ランカが歌ってる」

「近づくな、 Ω に汚されるぞ」

ただ一つ、困ったことはランカが Ω であり、ファーストヒートも前だというのに、常人の3倍近いフェロモンを発していることだ。耐性のない α だと、まず間違はなくランカに惹かれてしまう。

特に歌を歌った時にその傾向が強く、年を経るごとに人前で歌うことを禁止されていた。

したがって上記のような扱いをされることも決して少なくはない。

「はあ」

ランカも15になった。

そろそろ自分にもヒートが来るということはわかっていた。

時期が近づくにつれ、フェロモンも多くなり、歌うこと自体の禁止も考えられている。

——なんで。

自分は自由に歌えないのだろう。

こんなに不便な場所に閉じ込められているのだろう。

誰か、王子様のように助け出しに来てくれないだろうか。

取り留めないことが頭をめぐり、いつも何も生み出さない。

α と会うことを極端に制限されているランカは自分の危険さを自覚していなかった。

そして、何より歌うことを制限されることが嫌で仕方なかった。

下手したら死ぬと言われるよりも。

*

「実験ですか？」

モニター越しに告げられた言葉にランカはきよとんとした。

α の人間と会う時は基本的にこういった形がとられていた。

研究者は上級になる程、 α が多く、ランカの影響を受けやすい。

『この薬を飲めば、フェロモン自体を抑える効果がでる』

物心ついた頃から変わらぬ、上司の顔を見つつ、ランカは目の前に持ち込まれたサンプルを眺める。

昔ながらの並んだカプセルたちが1シートあった。

飲み方は簡単で朝と夜に一錠ずつ飲めばいいらしい。

これを飲めば Ω から出るフェロモンの量を減らすことができる。

「私ヒート前なんですけど、条件は大丈夫ですか？」
飲んででもいい。

こんな邪魔にしなければならない、フェロモンを少なくしてくれるのであればとてもありがたい。

しかしフェロモンというものは通常ヒート時に最大量だされるものであり、ランカではそのサンプルは取れない。

実験データとしては不備を残したものになる。

目の前の上司がそれを見逃しているとは思わないが、一応ランカは聞いてみた。

『ランカの場合、通常時でさえヒート時の Ω に近い量が出る時がある。それを抑えることができれば十分ヒート時の Ω の抑制剤として価値がある』

抑制剤とは外の世界で Ω が暮らす際に飲むもの。

研究所で教えてもらった知識としてはそんなものだ。

元々周囲に α がいない生活をしていたランカには縁のないものだった。

通常の Ω は抑制剤を飲み発情期をないものとして普通の仕事をしているものが大半だ。

フェロモンの多さは個人差があるため、同じ抑制剤では効果が均一にならない。

その微調整はヒート時のサンプルを取って少しずつ埋めていくしかない。

突発的に起こってしまったヒートに対応するため、一級強い薬が必要とされることも多い。

ランカは目の前にある薬を見つめた。

今までも何度かこのパターンは経験している。

最初の頃は期待も大きかったが、そのたび毎に効かない薬に落胆したのも同じ数だけある。

「わかりました。今日からですか？」

『ああ。採血は昨日したばかりだな？』

「そうですよ」

——今度こそ、ここから出られるといいのに。

そんな微かな、しかし大望を持ちながらランカはカプセルを口に含んだ。

飲み始めてから一週間。

初めての採血の日がやってきた。

生活自体に大きな変化は感じられない。

検査結果を待つランカの前にその結果は考えてもいない姿で現れた。

「おめでとう、ランカ」

シユツと自動扉が開く音と共に、久方ぶりに見つめる上司の顔がそこにあった。

一瞬何が起こったのかわからなくて、ランカはぽかんと間抜けな表情をさらす。

同じ空間に、 α がいる。

欲情していない、通常の姿の α が。

そんな体験をするのもう何年ぶりだろう。

ランカ自身覚えていなかった。

「え？ あれ……うそ……？」

——もしかして、あの薬効いたの？

信じたい。

信じられない。

でも信じたい。

ゼントラーデーの血を引くランカの髪が喜びに沸くように舞い上がった。

「私が君の目の前にいることがその証拠だ。君のフェロモンは通常より少し下まで抑えられている」

おめでとう、二回目に言われたその言葉にランカは初めて実感が湧いた。

嬉しくて、うれしくて、ウレシクテ——今すぐにも歌いだしたかった。

外に出たら、何をしよう。

そう考えて暇をつぶしたことも数えきれないくらいだ。

何より、外に出られたら絶対にしたいことがランカにはあった。

「ライブも行っていいですか?」

「ん、ああ、彼女のか」

詰め寄らんばかりのランカの勢いに上司は少し身を引いた。

シエリル・ノーム。

この世界で一番有名な歌姫。

彼女の歌を聞かない日はないとまで言われる人物だ。

デビュー当初からランカは彼女の大ファンであり、ライブにも行きたいとずっとお願いしていた。

だが、ここで大問題が発生する。

人数が多いため α が多数いる可能性が高かった。

また、シエリル自体も α であり、ランカは参加することを止められていたのだ。

「まあ、大丈夫だろう」

「ありがとうございます!」

シエリルのライブ。

字面だけで嬉しくてたまらない。

全ての曲をダウンロードしていたし、お気に入りの歌も何曲もある。

彼女の映っている写真や雑誌もほぼ集めた。

——初めて、生のシエリル・ノームを見れる

行けると決まったわけでもないライブに、もはや行ける気でうずうずしてしまう。

そんなランカの様子に上司は苦笑して一言付け加えた。

「ただ、チケットは自分で取れよ?」

「はい、ばっちりです、任せてください!!」

ランカの笑顔はこの時、フェロモン関係なしに人を落とせるほどのものだった。

*

研究所の前にランカと上司の姿があった。

ランカの背中には小さいながらリュックが背負っており、服装自体も動きやすいものであることから遠出することが伺える。

「本当に、行くのか？」

「はい」

虚仮の一念という言葉がある通り、ランカは検査結果が出た後すぐにシエリルのライブへと応募していた。

ただでさえ人気の高いアーティストのプラチナチケットである。

外に出ることになるのはもっと遅くなると研究所側は予想していたのだ。

「検査結果も問題なかったんですし、大丈夫ですよ」

「それは、そうなんだが」

あれから三か月、毎日ランカはサンプルの薬を飲み続けた。

その結果、フェロモンの量はファーストヒート前の Ω と同じくらいまで低下していた。

α であっても、今のランカが Ω だと判断するのは難しい。

「興奮するとフェロモン値があがりやすい。それだけは気を付けてくれ」

「はい」

興奮ならもうしている。

チケットが実際手元に届いてから、ずっと胸が痛い。

ドキドキして、期待しすぎて、眠れない時さえあったのだ。

今のランカにその言葉は無意味だろう。

「いつてきますー！」

大きく手を振って、ランカは外の世界へと歩き出す。

その背中が大きく弾んでいた。

敷地が出る。

どんどん小さくなる研究所を一度振り返って、それから後ろを見ることはなかった。

人ごみに紛れ、列車に乗って、大蛇のように連なる列に並ぶ。

——すごい人。この人たち皆シエリルファンなんふあ！

ランカはシエリルに憧れていた。

それは歌だけではない。

彼女が何物にも縛られない α であることもそれに入っていた。ランカのセカンドバースである Ω と違い、 α に制約はほとんどない。

——何をしても、何を表現しても、どこで歌っても、シエリルはみんなを惹きつけてしまう。

Ω として生まれたランカとは違う。天性のカリスマだ。

多くの人は α として生まれたのだから、それくらい当然だと批判する。

しかしランカにはシエリルの輝きが α という一点により生まれるものではないことをわかつていた。

彼女の歌にも、ダンスにも、演出にも、全て煌く努力が見える。

それを打ち消してしまうなんて、やはりセカンドバースなんていないと眉を顰めることさえあった。

「つと、すまん。大丈夫か？」

思考の海に沈んでいたランカの体に押される。

大部入場ゲートが近くなったため、人ごみが密集してきているのだ。

「いえっ、むしろ私こそぼんやりしてて」

はっとして顔を上げたランカに衝撃が走る。

そこにいたのは驚くくらい美人な顔をした男の人だった。

帽子とサングラスをしているために、同じ目線の人にはわからないだろう。

だが彼より背が小さいランカからはまるで覗き込むようにして彼の顔が見えた。

「人混みがすごくてな。大丈夫だったなら、よかった」

にこりと微笑む顔はまるで精巧な人形のようにだった。

——こんな綺麗な男の人もいるんだ。

その顔に見惚れているうちに、彼の姿は人の間に消えてしまった。

「すごいなあ」

シエリルも凄ければ、シエリルのファンも凄い。
ライブが始まる前から感心してしまうランカだった。

後に、あの彼が歌舞伎の天才女形アルトだと気づくのは別の話である。

*

一方、人ごみをどうにか抜けたアルトは呼び出されたシエリルの楽屋へと裏口を歩いていった。

「シエリルー、お前なあ、なんで一般のチケツト送ってくるんだよ」

「あら、いつだったか、アナタもアタシに一般のチケツト送ってきたじゃない」

大体、アナタ来るかもわからないしね、とシエリルはアルトに向かって肩をすくめる。

つまりは仕返しだ。しかも、非常に遠い昔の。

案外根に持つ性格らしい幼馴染に、アルトは深々と息を吐いた。

「いつもよりいい匂いだけど、まさかヒート中？」

それより、と話を変えたシエリルがアルトへと近づくとそう言い放った。

鼻をアルトの体へと近づけ匂いを嗅ぐ。

部外者が見たら恋人と見まごう距離だ。

「はあ？ そんなわけないだろ」

アルトはここまで大多数の β と、もしかしたらいたかもしれない α の人波をかき分けてきた。

もし、アルトがヒート中だったら α は確実に、 β もひよつとしたら襲ってくる。

そんな危険な時期に被っていたとしたら、シエリルのライブは丁重にお断りさせてもらう。

「そう……変なの、いつもよりドキドキするわ」

少しだけ頬を赤らめて、シエリルは彼から距離を取った。

不意に手を出さないような距離を開くためにも見えたし、彼への興味がなくなつたようにも見えた。

「ライブ前で興奮してるんじゃないのか？」

アルトもそう言い、この話題を終わらせる。
しかし、何人もの発情した α を見てきたアルトにはわかっていた。
シエリルの瞳が発情前の α と同じような蕩け方をしていることを。

#2
e n d

息が詰まる。

どうにもイイ言葉が出てこない。

バカな幼馴染は、間の悪いことに発情中。

何か気分を変えられるものを探していた。

運命の切れ端を掴むことになるなんて思わずに。

#3

イライラして、ムシヤクシヤして、落ち着いていられなかった。

あまりにも落ち着くなく歩き回るシエリルに、グレイスは呆れたように口角を上げた。

くいつと眼鏡を上げる仕草にさえ怒れる気がシエリルにはした。

「アナタ、生理じゃないんだから」

「生まれてこの方来たことないわよっ」

ぴしやりとシエリルはグレイスの言葉を切る。

αの女性に月経、いわゆる生理と呼ばれる現象はほぼない。

理由は様々に研究されているが、子供を孕む可能性がほぼないため遺伝子的にそうなっているのだろうというのが通説だった。

力を入れていたライブも終わり、一端休養も含めた創作活動の時期にシエリルは入っていた。

いつもなら休養中の経験やら、ライブの時の感動やらで、ある程度作品ができてきてもおかしくない時期だ。

それなのに一曲も作れない。それどころか、言葉の一欠けら、メロディの一節さえ見えない。

スランプと評される期間に足を突っ込んでいた。

「だめ、なーんも、ないわ」

ペンを片手に紙に向かってみてもダメ。

気晴らしに散歩や、シヨッピング、レッスンをしてもダメ。

気分が晴れない。イライラする。

原因はわからない。

だがいつからかはわかる。

あのライブが終わってしまった日からだった。

最初はただ大きな仕事が終わって寂しいだけなのかと思っていた。

燃え尽き症候群、なんて病気もあるのだし、それに近いのかなと

シエリルは考えていた。

だからしばらく休んで、遊んで、働いて。

そうする内になくなる類の感情だと見誤っていたのだ。

——あのライブで何か失敗したかしら。

もんもんと考え、答えが出ず、先ほどグレイスに指摘された通りの状態になった。

「スランプなら、一度全然違うことをしてみたらどうかしら？」

「違うこと？」

訝し気にグレイスを見る。

苛立ちで乱れた髪が顔にかかる。

興味を引けたことに満足したのか、グレイスは綺麗な笑顔を作ると

チラシを一枚差し出した。

*

「オーデイション？」

シエリルは社長室でティーカップを片手に聞き返した。

出された紅茶は芳醇な香りで鼻腔をくすぐる。

この事務所からデビューしたシエリルだったが、オーデイションをするというのは初めて聞いた話だった。

「そうデスネ、うちも大分大きくなりましたし、今年からやってみようという話になりましたデス」

グレイスさんとも相談しまして、と社長とシエリルの専属マネー

ジャーがアイコンタクトを交わす。

ふーんと気のない相槌を打った。

オーデイションそのものに興味はない。

シエリルに言わせれば、出てくる人間は勝手に出てくる。

勝手に出てくるくらいの人間でないところの世界ではやっていけない。

「それで、アタシに審査員でもしなさいと?」

確かに新しく出てくる芽を見るのは気分転換になりそうだ。

刺激的な子もいるかもれない。

それでも——シエリルにとっては暇つぶしでしかない。

「いえ、最初はその予定だったのデスが」

シエリルは眉を顰める。

社長はにこにことした表情を崩すことない。

「本当は何人かに絞って、本選で合格者を決める予定だったのよ」
手元の書類を束のまま振って、その量の多さを見せつける。

シエリルのネームバリエーションもあり、事務所の規模の割には多い。

これであればグレイスの言っていたように、書類選考後に本選もできらるだろう。

だが、その予定は潰れたらしい。

「なに、どっかから横やりでも入ったの?」

「いえいえ、まさか。まあ、この音源聞いてみてクダサイ」

シエリルの目の前に出されたプレーヤーとイヤホン。

それは自分が曲を作り、渡す時と同じ使い慣れたものだった。

白いイヤホンの末端を持ち、指先で弄ぶ。

「これで、つまらない曲だったら怒るわよ?」

にっこり笑って社長へ言い放つ。

ただでさえ苛立ちが止まらない状態なのだ。

もどから穏やかとは程遠い激しさがシエリルにはある。

「大丈夫デス」

自信を持って言い切られる。

へえ、とシエリルは面白そうに唇を半円にした。

耳へとイヤホンを差し込み、音量を確認してから再生を始める。

静かに目を閉じて音を待つ彼女の世界に染み渡るようにその声は歌い始めた。

——アイモね。

アイモは特殊な曲である。

どこの言語なのか、なんとやっているか、いまいち分からない。それでもシエリルはこの愛の歌を好んでいたし、たまに歌ったりしていた。

自分とは違う声質が紡ぐ柔らかな音。

シエリルの荒ぶっていた心を優しく撫でつけられるような気分だった。

「この子、面白いわ」

耳からイヤホンを外し第一声。シエリルはそう言い放っていた。

その瞳は今までの憂鬱を忘れたかのよな輝きに満ちる。

耳に残る声は透き通っていて、シエリルとは異なる響きを持っていた。

この声と合わせられれば、とてつもないことが起こる気がした。

「これで決まりですね」

「ハイ。いやー、オーディションもやってみるべきデスネ」

シエリルの耳にシエリル自身はもちろん、グレイスも社長も自信を持っていった。

その彼女が面白いといった声と歌。

もう本選の必要はないと言ってよかった。

*

シエリルのライブが終わってから、生活を変えた一人にランカも含まれる。

大勢の中に入っただけであっても、特に問題が発生しなかったことを考慮し、試験的に外で暮らすことが許された。

ただ週に一回の検査は変わらず、結果もよろしくない値を出すようであれば、すぐに元の暮らしへと戻される。

色々制約は多かったが、それでもランカは嬉しかった。

初めての一人暮らし。

研究所が手を回してくれたのか、借りたアパートはβしかない。

今までαやΩという希少種にばかり囲まれていたため、それが新鮮だった。

普通に学校へ通い、友人を作り、バイトをする。
憧れていた生活だ。

「送っちゃった」

勢いで送った書類と音源データ。

送信完了の文字が画面に映るのを見て、やってしまったと思う。
充実した毎日だった。研究所にいた頃とは比べ物にならないほど。
そんな中でも、ランカは歌うことに夢を抱かずにはいられなかつた。

いつ、あの生活に戻ってしまいかわからない。

だから、できるうちにやりたいことは全てやってしまおうという火事場のバカ力に似た決心をランカはしてしまっていた。

「ランカさん？ どうしたんですか」

バイト先のお店で一緒に働くことになったナナセがランカに尋ねる。

同い年という気安さもあり、まだ一か月働いていない時期にしては親しい部類に入っていた。

そしてランカの事情を知らないβの一人だった。

「ううー、これに出しちゃった」

ナナセに端末を押し付けるように渡すとランカはその場に座り込んだ。

もう仕事は終わっており、あとは着替えて帰るだけだ。

今さら、何度も取り直した曲やかちこちに緊張していた書類の写真を思い出して赤面する。

顔が熱い。

頬に手を当てれば驚くほどの熱を持っていた。

「ああ、シエリルさんこの！ すごいじゃないですか」

ランカのシエリル好きは職場の仲間の知るところである。

当然、ナナセもその熱意を知っていたし、今回のオーディションで悩んでいたこともわかっている。

小柄で、まるで子犬のような性格のランカはお客さんからもバイト仲間からも好かれている。

人からフェロモン無しに好かれる。

それ自体が初めての経験に近く、最初は戸惑った。

ナンパのような軽口を飛ばされることも身構えて、だが慣れてくるとそれはただの挨拶に過ぎないとわかり、ランカ自身軽く返せるようになった。

「ランカさんは歌も上手ですし、きつと大丈夫ですよ」

「ありがとう」

座り込むランカに視線を合わせ、ナナセが励ましてくれる。

彼女にも何度かカラオケボックスでの練習に付き合ってもらっていた。

かわいいものに目のないナナセは的確にアドバイスをくれ、ランカは本当に助けられた。

——シエリルさん

初めてのライブ。生で目にした輝く姿。そして圧倒的な歌、歌、歌。どれもがランカの中に刻まれて、惹きつけられる。

心の中で呼ぶときでさえ、敬称をつけるようになっていた。

もし、彼女のように歌えたら。

彼女の隣で歌えたら。

彼女と一緒に歌えたら。

きつと、素晴らしいことになる。

そんな強い予感がランカの中で溢れて、止まらなかった。

「シエリルさん」

画面を見つめて、そつと名前を呼ぶ。

満員に近い電車は混雑しており、なんとも言えないざわめきに満ちていた。

ナナセとは店の前で別れ、今は一人帰宅する身だ。

耳に差し込んだイヤホンからはあの日ライブで使われた曲が流れてくる。

瞳を閉じれば、それだけでランカはあのライブ会場に戻ることができた。

「〜♪」

電車を降りてから家まで歩く。

恥ずかしいので声は出さないが、鼻歌は出るようになっていた。

歌うことさえ禁止された研究所とは違い、今は誰も見とがめることもない。

それが嬉しくて仕方ない。

イヤホンをして、鼻歌を歌う可愛らしい少女を一定の距離を取りながら見つめる姿があった。

瞳に込められる熱量は異常であり、まるで発情しているように見えた。

ずっとそういう視線と無頓着だったランカはまだ気づいていない。

人生の禍福は交互にやってくるのだということ。

3 e n d

#4

暗かった世界に光が生まれた。
その時、シエリルは歌を聞いた。
乾いていた世界に水が注がれた。
その時、シエリルは二度目の生を得た。
注がれた水を溢れさせる瞬間、シエリルは初めて運命を見た。

#4

仕事も終わり事務所の入っているビルへと戻る。

いつもならシエリル以外の音がしない建物に、シエリル以外の歌が聞こえる。

そして、それはずっと待っていた声だった。

「このアイモ」

「ああ、例の子が今日から来るみたいよ」

グレイスへと視線をやれば、それだけで察してくれる。

この事務所を引つ張るシエリルに遠慮してるのか、他の歌い手はこのビルで練習をしない。

気にせずに練習をしてくれと伝えてはあるが今のところシエリル以外の音は聞こえなかった。

無機質な空間に自分以外の声が聞こえるのが心地よくて頬が緩む。

「あら、とても気に入っているのね」

女王様とも揶揄されるシエリルの機嫌がここまでいいのは珍しい。

基本的に何かを渴望して、それをぶつけるようなスタイルが彼女の歌には多かった。

ずっと側でマネージングしていたグレイスにはよくわかった。

「声はね。まだ、どんな子かも知らないもの」

ふふっと楽しそうに笑い、鼻歌でハミングする。

シエリルのほとんどは歌でできていた。

新しい歌を運んできてくれる存在は手放しで歓迎するし、その人物がいい子だったら言うことはない。

生まれてから今まで、ここまでワクワクする歌を届けてくれる存在はいなかった。

“銀河の歌姫”という名前は何よりも孤独だ。

——この広い銀河に自分しか歌姫がないなんて、なんてことだろう。

割と本気でそんなことを考えることもあった。

シエリルの周りにはたくさんの人がいる。

支えてくれる人も、ファンも、群れてくる狼だって。

だが、それらは全て対等には立ってくれなくて、自分と対になってくれるような存在をシエリルは探していた。

「とても、それだけには見えないけれど」

「わからないわ、とてもワクワクしてるってこと以外は」

グレイスが言い、シエリルは笑った。

自分でも分からない。それでも高ぶっているのはわかる。

否定も、肯定もせず、シエリルは出会いの瞬間を待つことにした。

*

「ランカです、よろしくお願いしますー!」

元気よく下げられた頭と共に緑の髪がぴよこんと跳ねる。

天真爛漫という言葉をそのまま表現したような少女が緊張した面持ちで頭を下げていた。

事務所で次の仕事の打ち合わせをしていたシエリルは歌が止まった時からそわそわしてしまっていた。

彼女が自分のファンだということは聞いていた。

その部分に興味はあまり湧かなかった。

シエリルのファンは——この言い方は酷いが、掃いて捨てるほどいる。

シエリル自身が今一番求めているのはその類のものではない。

「シエリル・ノームよ。よろしく、ランカちゃん」

今綺麗に笑えているか、シエリルには自信がなかった。歌が止まって、足音が近づいて、そのたびに動悸が増した。扉の前で何かを話している声が聞こえて、それから扉が開けられる。

バチンと音がしそうなほど、強く視線がぶつかった。きつと間抜けな表情をしていただろう。

それほど、彼女以外の何も見えなくなった。

——見つけた。

最初にそう教えてきたのは、どの細胞だっただろうか。

一瞬にしてシエリルの全身がランカに集まり、それから同じサインを出した。

体の底から歓喜の渦が巻き起こり、全てを変えようとする。

それを押しとどめるのはシエリルをしても難しいことだった。

「は、はいー」

大ききなくらい、力強く頷いたランカに笑みがこぼれる。

彼女の瞳にあるのは純粹な喜びであり、シエリルと同じものは一欠けから見当たらない。

——言ってたことと違うじゃない、アルト。

発情期も収まり、また仕事に忙しい男を引っ張り出してきて脳内で文句を言う。

運命の番は見た瞬間に、“お互いが”番になると理解する。

しかし目の前の少女にその様子は見られず、シエリルとしても聞きづらい。

ましてや自分だけ一目ぼれしたような状況になることなどプライドが許さなかった。

そういう複雑な感情を矜持のみで覆い隠し、シエリルは銀河の歌姫たらんと笑う。

「あなたの歌、とてもいいわ。だけど、アタシを追いかけるにはまだ足りない」

もつともつと貴女の歌を聞かせて。

もつともつと熱くさせて。

もつともつと。

溢れ出しそうな欲望を押しとどめ、煽るような言葉を口に出す。シエリルが欲しいのは、ただの後輩ではないのだ。

歌うことに命を懸けていいと思っていて、実際に命を懸けられる人。シエリルと同じくらい歌を愛している人だ。

——追いかけてくれるかしら？

光るものは何があっても必ず光る。

だが輝き続けられるかは別の話である。

銀河の妖精として、頂上にいるシエリルの背中を見て、それでも追いかけてこられる。

そういう人間は非常に少ない。

「はい、必ず」

力強い瞳にぞくりとした。

体中が喜んで仕方ない。

今だったらいくらでもαとしての務めを果たせる気がした。

この日、シエリルは手に入るまいと諦めていた二つ。

ライバルと番。

その両方を一気に見つけることに成功した。

*

体の中で心臓だけが大きくなったようだ。

全身に鳥肌が立ち、熱が湧く。

自分自身の体を鎮めるかのように、シエリルは己の体に腕を回していた。

「どうしよう……どうしたらいいのよ!」

「お前なあ、来てすぐに言うことがそれか?」

月の綺麗な晩だった。

動物はもちろん人も月に操られて発情するという。

操られるにはもってこいの月夜だ。

門を道場破りの勢いで突破して、シエリルは幼馴染の部屋の障子を遠慮なく開けた。

そこにいたのは、いつもながら涼しい顔をしたアルトであった。

居ても立っても居られなくて叫んだシエリルに呆れた顔をよこす。
「今度はどうした？」

シエリルの幼馴染を長年務めているアルトにとっては慣れた言動だった。

感情の起伏が激しい幼馴染は、アルトの家の扉をいつか壊すのではないかと思っている。

「癩だけど、すっごく、癩だけど」

「ああ？」

ぎらぎらと光る瞳でにらみつけられ、身に覚えのない苛立ちをぶつけられる。

普通であれば怒りそうなものだが、眉を顰めるだけで受け入れる形を取れるのがこの男のすごいところでもあった。

「あんたの言う通りだったみたいね、アルト」

ぎりりとシエリルが歯を食いしばる音が聞こえてきそうだった。

今まで貯めていた鬱憤が全て出てきているような荒々しい表情だ。

まるで気が立っている獣のようで、アルトはどこか納得した。

「見つけたのか、運命の番」

「見つけたわよ！ 見つけたわよ、でもね」

手のひらを強くテールブルへとたたきつける。

銀河の歌姫の柔らかな手には似合わない仕草だが、激情家のシエリルには似合う仕草でもあった。

じんじんする手のひらに少しだけ気分がまぎれる。

今のシエリルは自分の本能と戦っていた。

運命の番。

いるとも思わなかったものが、目の前に転がり落ちてきた。

幸いと言えるかはわからない。

その番のおかげで、今シエリルはこんなにも荒れているのだから。

「あっちは、ぜんっぜん、意識してないわ。どういことよ？」

綺麗なピンクブロンドの髪の毛をくしゃくしゃにかき上げる。

好き——というのも生ぬるい。

αとしての本能にまみれた感情。これは“欲”だ。

好きななんて可愛らしい言葉では表わすことができない。

「……へえ」

シエリルの言葉にアルトは少し表情を変化させる。

α としての番を見つけたということは、相手は Ω である。

その法則は何があっても乱れない。

だとしたら、アルトにとつてシエリルの言うことは少々おかしかった。

「振られたのか？ 銀河の妖精さん」

「失礼ね！ このシエリルが振ることはあつても、振られることはないわっ」

シエリル・ノームという人物を形作るのは、歌と歌だけに命を懸けている生き方だ。

自分の歌を広めるための努力は惜しまない。

——歌を歌うことだけで生きている。

そう表現してもおかしくないほど、シエリルはそのことに情熱を注いでいた。

ランカが歌うことで存在を確認しているのだとしたら。

シエリルは歌うことで自分を表現していた。

そして、そのどちらも自分の命が「歌」だともはや一方的に決めてしまっていた。

とても似た者同士の番だった。

「……あんなに」

シエリルはアルトをにらみつけていた視線を逸らし、うつむいた。

夕日がすぐに色を変えるように、先ほどまで燃え盛っていた感情は沈んでしまったらしい。

α としての本能。

シエリルはそれを理解しているつもりでいた。

周りの誰よりも、セカンドバースについて勉強した気でいた。

周囲が α として本能的に生活していく中で、いつも置いていかれそうだったからだ。

「あんなに、衝動的だなんて、思わなかったわ」

今思い出しても胸が痛い。

ドキドキしてきて、ムズムズしてきて、熱い。

発情じゃないことはわかっている。

わかっていたからこそ、怖かった。

「ああ、初めてだったな。α様」

「今なら俺のフェロモンも効くか？」と捻くれたことをきこうとして、アルトは言葉を噤んだ。

遠慮なく殴られそうな気がしたからだ。

ただでさえ商売道具を傷つけられてはたまらない。

アルトはがしがしと頭を掻き、それから座り込んでしまっている幼馴染の傍に立った。

この距離でもシエリルの様子が変わったようには思えない。

つまり、アルトのフェロモンは相変わらず効かないということだ。

——なんつー、強情。

口に出そうな言葉を押しとどめる。

これで銀河の妖精はプレイガールなんて噂が立った時もあるのだから、シエリルの世界の危うさと言ったららない。

「……歌えよ」

「えっ？」

「どうせ、お前のことだから、歌う以外の解決策がないに決まってる」
決めつけて、それからアルトは笑った。

呆氣にとられたような表情だったシエリルの口角が上がる。

アルトが柄にもなく慰めてくれようとしてくれているのがわかったからだ。

さらに、そのせいで照れている。

それがシエリルには面白くて仕方なかった。

「アルトにしては、いいこと言うわね」

ゆっくりと立ち上がり、窓際へと近寄る。

そこから見える月を眺めつつ、シエリルは息を大きく吸い込んだ。

その歌詞はまるでこれからのシエリルの決意を表しているかのようだった。

4

e
n
d

歌も恋も仕事も。

全てはこの性に絡められて得られないと持っていた。

それでも、欲しかったものはあるし。

目の前にあるそれに手を伸ばすことを諦めるわけにもいかない。

#5

ランカは走っていた。

ゼントラーデイの血は肉体を強固なものにする。

それでもこんな無茶苦茶に全力で走るなど初めての経験であり限界に近い。

「何なのっ……もう！」

息が切れる。汗が滴る。

興奮状態になるなど研究所からはきつく言われていたが、そんな役に立たないアドバイスはいらない。

確かにランカは油断していた。

薬は問題なく効いていたし、何より事務所に行く以外で α という人種に会うことがない。

自分の Ω 性のことなど検査の時以外もう関係ない気持ちだった。

後ろを振り向けば、近づいてはいないが遠くもならない距離に見知らぬ男が追いかけてきていた。

全速力でも振り切れないのは、 α の身体能力の高さゆえか。

このままでは逃げ切る前に自分の体力が尽きてしまうとランカにはわかっていた。

「飲み忘れたわけじゃないよねっ？」

自問自答する。

飲んだ。間違いなく。

いくら効いている自覚のない薬であっても、研究所ですつと育てきたランカは勝手に薬を止めることの意味を分かっていた。

発情期、フェロモンほどΩの自分にとって恐ろしいものはない。逆だというαが多いことも知っている。

Ωのフェロモンで惑わされるのはαであり、そのせいで迷惑をこうむるのもαだと言うのだ。

それでも、ランカはこう思ってしまう。

——発情くらい。

なんだというのだ。

αが発情するということはΩがいるということだ。

つまり、αは問答無用にΩを襲って、その欲求を解消することができる。

襲われるΩの意思はない。

酷い話ではないか。

自分にできる全力で足を回す。

それでも段々削られていく体力と気力。

捕まっていいたは絶対に思わないが、逃げ切れるとも思えない。

闇雲に走っていたせいで、ランカは自分の場所さえわからなかった。

「マネージャーさんのいう事聞けばよかった……！」

オーデイションに合格しても、ランカの日々に変化は少なかった。

毎日レッスンの時間が組み込まれただけの日常。

営業さえ、まともに行っていない。

たまにレッスンに顔を出してくれるシエリルとの会話だけが楽しみな日々だ。

それとてファンであった時のような楽しさの塊ではない。

少しだけ苦くて、自分が隣に行けないことが苦しい。

シエリルを見るたび、そういう感情にランカは襲われていた。

「なるべく、一人で行動しないでください。特に夜は」

マネージャーにそんなことを言われたのは、記憶に新しい。

シエリルのような売れっ子ならまだしも、ランカに専属のマネー

ジャーはいない。

送り迎えをしてくれる車もちろんない。

基本的に電車を乗り継ぐ生活をランカは変えていなかった。

知名度も、何もない自分がこういう目に合うことを考えていなかったのだ。

ちらりと後ろを振り返る。

発情しきった瞳が自分を食い入るように見ていた。

——食われる。

比喩でもなんでもなく。

きつと、ランカの存在自体が食われてしまう。

番にされてしまえば、どうしようもない。ランカの意味など消えてしまう。

あの男に捕まってしまえば、間違いなくそうなる未来が見えた。

「なんでっ—」

ずっと一人で歌っていた。

歌う事だけが、ランカの生きる意味だった。

このまま同じ部屋から出られず、一生を過ごしていくのかと思った時もある。

検査して、薬を投与され、また検査。

そういう未来しか見えなくて、死にたいと思ったことさえある。

そんなランカを支えていたのは歌であり、シエリルという歌姫の存在だった。

「……どうして」

変わらないと思っていた生活に変化が起きた。

死ぬまで出られないと思っていた部屋から出ることができた。

シエリルのライブに行けた。

シエリルと同じ事務所に入ることができた。

歌うことを続けられた。

——やっとなんて手に入れた人生を、こんなことで、こんな男で終えるわけにはいかない。

悲鳴を上げる心臓と、感覚がなくなり始めている足にひらすら言い

聞かせる。

捕まらない。

捕まりたくない。

あんな発情しきったαとやりたくない。

自分の番になるのは――。

理性を越えた本能が、何かの答えを出そうとしていたとき、ランカの足は限界を迎えた。

なんてことはない障害物に足をとられ、転ぶ。

痛みはなかった。

それよりも早く起き上がって逃げなければならぬ。

だが、一度止まった足はランカの言うことを聞いてくれなかった。

「っ」

荒い息遣いだけが聞こえた。

振り返ったランカともう数メートルの距離まで詰められていた。

逃げられない。どうしようもない。

これだけ走ったのに、人気は皆無だ。

むしろ、今の状態のランカが人の多い場所に行くのは難しいかもしれない。

絶体絶命の危機に、伸びてくる手に、ランカは抵抗しようと首筋を守った。

「ナニ、してくれてるのかしら？」

気持ち悪い手が自分に触れそうになった瞬間。

ランカは神様の声を聴いた。

プシューと一気に視界が白くなる。

嗅ぎなれた匂いに、ランカはそのスプレーが発情抑制剤だと知った。

悲しいことに、研究所でもよくお世話になっていた代物なので対処法はわかっている。

ランカが吸い込んでも問題はないが、目と口を押え、煙幕が晴れるのを待つのだ。

発情したαがこの煙を吸い込むと、発情が消される代わりにひどく

体力を消耗して動けなくなる。

どうにか、助かったという安堵がランカの胸をメた時、煙から白い手が伸びてきてランカを引っ張った。

「え」

まさか、と思った。

逃げなければと体が反応した。

すぐにこれはあの手ではないことに気づく。

「逃げるわよ」

耳を打ったのはランカが一番聞いてきた声。

この声を自分が間違えるはずがない。

シエリルの白くて華奢な手が、ランカの手首をつかんでいた。

その手のひらは熱く、力強い。

「はいー」

α に触れられたのは初めてだった。

研究所でも、今の生活になってからも、ランカに触る人はいない。

またランカ自身も α に触られることに苦手意識があった。

それは自分の幼いころの経験が原因である。

ただ不思議なことに、シエリルに触られるのは少しも嫌じゃなかった。

自分に触る手がひどく優しくかったからかもしれない。

その手に導かれて、ランカはシエリルが乗ってきた車に避難した。

「早く出して」

「はいはい」

シエリルはランカを押し込めるようにして後部座席へと座らせた。

そのまま苛立ちを隠しもしないとげのある声が運転席へと飛ぶ。

ランカはさっきの男と隔離された安心感に大きく息を吸い込んだ。

さっきまでの発情した空気とは違う。

大好きなシエリルの香りがした。

「ランカちゃん、大丈夫？」

「あ、はい。まだ、ちょっと苦しいですけど……大丈夫です」
心臓はまだバクバクしている。

何度が大きく深呼吸をしても、効果はあまりない。

助かった安堵と同時に、恐怖が蘇ってくる。

かたかたと手が震えるのを止められない。

「無事でよかったわ。触られてない？」

「はい」

暗い車内でシェリルのピンクブロンドの髪は光っているかのようだった。

かすかに差し込む光にキラキラと色を変える。

こんな時でさえ、ランカはその横顔を眺めることを止められなかった。

真つすぐ前を向くシェリルの花の顔。

抜けるような白い肌に金糸が彩を加える。

美しかった。ため息をつくほどに。

「ありがとうございます、シェリルさん」

自分の体の震えを隠すように、肘と肘を抱える。

バレないように祈った。

自分の体のことも、事情のことも、何もかも。

ただ、それはあまりに希望的観測すぎるとランカにも分かっていた。

「あなたが無事なら、それでいいわ」

頑なに前を向いたままのシェリル。

それでもその唇から零れる言葉は優しい。

震える体を隠すように、シェリルのコートがランカの肩にかけられた。

シェリルの匂いがして、あつたかくて、優しくて、涙がこぼれた。

「ありがとうございます」

何も聞かない優しさが。

ただ傍にいてくれることが。

どんなにランカにとって特別だったか、きっとシェリルは知らない。

そして、ランカも今のシェリルが何を考えているかわかりはしな

#5
e
n
d

か
つ
た。
。

#6

イライラした。

このくそつたれな世界を壊したくなかった。

そういう衝動は昔からあったけれど。

この時ほど、ひどい感情はシエリルにしても初めてだった。

#6

シエリルが異変に気付いたのは気晴らしに買い物に出ているときだった。

ふと目について服を手を取って、ランカの事を頭に思い浮かべていた。

ランカはシエリルの期待通り、真摯に歌うことに向かい合っている。

レッスンにシエリルが顔を出すとまるで犬のように喜んで、それが可愛らしかった。

そんな彼女をシエリルはわかりやすく溺愛していた。
グレイスも呆れる溺愛っぷりだが、気にはならない。

こうやって買い物でさえランカの顔が浮かぶのは流石に重症だと自分でも思っていた。

——シエリルさん。

彼女の声が自分を呼ぶたび、胸の奥がじんとする。

今思い出すだけで、その現象は起きて、シエリルは一人類を緩めた。
「あら？」

今日もこの後、事務所に顔を出してランカのレッスンを見る予定だった。

彼女の側にいると曲作りも捗る。

今まで部屋にこもってばかりだったシエリルの変わりように、会社

のスタッフも驚いていた。

シエリルは漂ってきた匂いに嗅覚を集中させる。

甘い匂いだった。その匂いをシエリルは知っていた。

ランカと出会って初めて感じるようになった匂いだった。

「グレイス？甘い匂いがしない？」

「いいえ、特に何も変わっていないわよ」

確認の意味も含めて、シエリルはグレイスに尋ねる。

彼女はβだ。インプラントで身体能力が鍛えられているとはいえ、

第二の性は越えられない。

βに感じ取れなくて、αに感じ取れるもの。

それはΩのフェロモン以外ありえない。

シエリルはランカ以外のフェロモンに気づいたことはなかった。

「いやな予感がするわ。しかも、とびきり」

シエリルは手に持っていた可愛らしいワンピースをラックに戻す。

知らず慌てていたようで、いつもに比べて大きめの音が出た。

足早に車に戻ろうとすればグレイスが後をついてくる。

「どうしたの？」

「嫌な予感がするから、私の言う方に車を走らせてくれる？」

説明するのも面倒くさくて、シエリルは自分の要望だけを伝えた。

普通なら怒りそうな要求だが、気まぐれな銀河の歌姫はこういうわ

がままをよくマネージャーに伝えていた。

またか、と小さくため息をついたグレイスは何も言わず運転席へ

座った。

シエリルは小さく窓を開けた状態で指示を出す。

甘い匂いは消えることなく、はつきりとシエリルに届いていた。

——いくらなんでも、甘すぎじゃない？

アルトから聞いていた話ではある。

自分が発情するフェロモンは甘く感じると。

また番になった二人の間ではフェロモンが届きやすい、効きやすい

とも言われている。

ランカが現れて、シエリルはもう一度セカンドバースについて調べ

た。

今まで自分とは関係ないと思っていた、ヒートや番のところまで細かく確認した。

「番でもなければ、距離もあるって言うのにね……」

Ωのフェロモンは番がいないと無差別に効く。

周囲のαは自然とΩの周りに集められるのだ。

しかし、それにしたって屋内の限られた空間の話である。

こんな人の多い、屋外でもはつきりと届くフェロモンなんてどの論文にも載っていないかった。

わずかな隙間からでも、今のシエリルにとっては十分な情報だった。

運転しているグレイスに指示を出して町中を走る。

段々と人気のない路地裏の方へと走り出し、シエリルの表情は険しさを増す。

「ねえ、グレイス。抑制剤って、あつたかしら？」

段々濃くなる匂いに、ぐつぐつと沸騰しそうになる頭を押さえる。

——これはヒートじゃない。

なんでそう思うかシエリルにはわからなかったが、本能的に違うと思っただ。

——これは怒りだ。

自分のものが取られそうになるときの怒り。攻撃性に溢れた衝動。

きつと、この匂いの先にいるのはランカで、その側には自分以外のαがいる。

そう考えただけで、嫉妬に狂いそうになる。

「どっち用もあるわよ」

「じゃ、一番強いのがくれる？」

「……使うの？」

「私にじゃないわよ……たぶん」

ヒートになったことはない。どうなるかはわからない。

もし自分まで発情してしまったとしても、グレイスが上手いことま

とめてくれる。

シエリルの目標は、ランカを確保することだけだった。

*

——神様に感謝したことなんてない。

この容姿になったことも、歌で生きていけるといいうことも、奇跡的なことだとはわかっている。

それでもシエリルは自分の道を切り開いてきたのは自分だと言う自負があった。

シエリルにとって神は上から見つめているだけの存在だった。そんな存在に今日、初めてラブコールをかけていいと思った。ランカに自分以外の α が触れるのを防いでくれて。

彼女の危機に自分を間に合わせてくれて。

初めて「神様、ありがとうございます」と素直に言えそうな気がした。

「ランカちゃん……い！」

甘い匂いが漂う路地裏。

車から急いで降りて、ランカの元へと走る。

シエリルの目にランカが襲われているところは見えていない。

見えていなくても、匂いだけで十分だった。

「これは……あの子、普通の Ω じゃないわね」

シエリルと同じように、車から降りたグレイスが眉を顰める。

β であるグレイスにフェロモンは効かない。

しかし、インプラントによりフェロモンを簡易的に測ることができるグレイスにはその空間の異常さが分かった。

シエリルはグレイスから手渡されていた抑制剤を手にとり走った。

ヒールの地面をたたく音が甲高く響く。

どうしてやろうか、ぐつぐつとした何かシエリルの中を掻きまわしている。

セカンドバースに関係なく、暴行は犯罪だ。

抑制剤を頭から浴びせて、動けなくなるところを警察に引き渡すのはたやすい。

しかし、ランカの立場がそれを危うくさせる。
新人の歌手で、Ω。

スキヤンダルがつくには、まだ弱すぎた。

「どうでも、いいわ」

αとかΩとか。

新人アーティストとスキヤンダルとか。

今のシェリルには、全てが二の次だった。

大事なのはランカが無事か。それだけだ。

路地裏を曲がる。

普段のシェリルだったら、絶対に入り込まない通り。

きつと、ランカだって普段であれば足を踏み入れないだろう場所

だ。

そこにいる、と明確にシェリルにはわかった。

「ナニ、してくれてるのかしら？」

道に倒れているランカに覆いかぶさるように男がのろうとしていた。

Ωの反射なのか、ランカは自然と首筋を守っている。

その表情にあるのは、強い嫌悪だけだ。

ぶちんと、自分のどこかが切れる音がした。

触るなど叫ばなかったのは、一欠けらだけ残った「ランカの前で無

様な恰好はできない」という矜持があったからだ。

でなければ、きつと、とんでもないことをシェリルはしていた。

男にぶつけるような勢いで抑制剤を叩きつける。

すぐさま白煙が立ち込め、シェリルは少し気分が下がる。

発情していない自分でさえこの嫌悪感だ。

無理やり抑制させられるこの男の負担は考えるまでもない。

「逃げるわよ」

男に触るのも嫌で、避けるようにしてランカの手を取った。

一瞬びくりと怯えた表情をしたランカだったが、シェリルだと分か

れば表情を緩めた。

紅い瞳が安堵ににじむ。

緑の髪が柔らかく跳ねる。

その全てが、シエリルには輝いて見えた。

じん、と握った手のひらが熱くなる。

そこから一瞬にして体全体に熱が伝わった。

きっと今の自分の頬は赤い。鏡を見なくてもわかる。

——抑制剤があつてよかった。

きつと、今の状態は発情に近い。

いや、もしかしたら発情しているのかもしれない。

それが抑制剤でうやむやになっているだけで、シエリルは今初めてのヒートを迎えている可能性があつた。

強い本能が理性を覆い隠そうとする。

それでも手の中にある子を襲つてしまおうとは思えなかつた。

——私はシエリルよ。

相手の感情を考えずに襲うなんて格好悪いことはできない。

何より運命の番を傷つけない。

辛くて仕方がないが、シエリルはランカを大切にしたかつた。

グレイスの待つ車へと走り、ランカを押し込めるようにして後部座席に入れた。

肩越しに後ろを振り向けば、まだ白い煙があたりを覆っている。

彼の処理はグレイスに任せるのが一番だろう。

車の扉を閉める。

抑制剤の残り香が少しだけ苦かつた。

「はやく、出して」

声が震えていない自信はなかつた。

初めての濃いフェロモンに、かき消すような抑制剤。

この二つはシエリルにしても初めての体験だったし、体への負担は無視できない。

何より、隣にいるランカが存在がいつ発情状態へと自分を導くかシエリルにもわからなかつた。

ただ、ひたすらに前を見つめる。横を向いてはならないとシエリルは自分に言い聞かせた。

路地裏を抜けて、会社に着くまでの我慢だ。

ランカの状態を確認するように、何個か言葉を交わす。

念のための確認だったが、触られていないことにシエリルは安堵した。

さつき見た限りでは大きな傷や、服装の乱れもない。

だがランカの体が小刻みに震えていることは隠しようがなかった。

「あなたが無事なら、それでいいわ」

隣を見ずにコートをかけることが難しいと、シエリルはこの時初めて知った。

#6 e n d

また捕らわれる。

眩しさも暗さも知らなかった空間。

全てが輝いていたころ、その中で一番輝いていたのは何か。

思い出せない。

#7

「ここですか?」

「ええ、アタシの幼馴染の家……あんまり使いたくはなかったけど」

車に揺られて着いたのは、とても大きなお屋敷だった。

フロンティアでよく目にする建物たちとは趣ががらりと違う。

二階建てだが家を囲む塀はどこまでも続いている。

ランカの視力をもってしてもその果ては見えなかった。

シエリルが先に車を降り、ランカはその後をついていく。

辺りは先ほどまでの喧騒とは打って変わった静謐さを保っていた。

(この地区って……)

周囲を確認するように見回すも、どこなのか見当もつかない。

一軒一軒の建物の規模が違うことだけわかり、自分には縁がない高級住宅街であった。

掲げられた表札には「早乙女」と達筆な字が書いてあった。

「アルト……!」

「ちよ、シエリルさん、今の時間にそんな声を出しちゃ……!」

見るからに立派な門を遠慮なくどんと叩き、幼馴染の名前を呼ぶシエリル。

ランカはこの地区の静謐さに似合わない大声にびくりと肩を震わせた。

トップスターとしていつも優雅な行動を見せている姿からは想像

もつかない姿だ。

その分、相手の幼馴染との親密さを感じランカは胸の奥がチクリとした。

「大丈夫よ」

いつものことだもの、と言外に語る瞳。

深い青空を思わせる色は夜に見ればさらに神秘的な色を含む。

元々の身長差もあって見上げる形になるランカにはシエリルの瞳が淡く輝いているように見えた。

「なあに、ランカちゃん。そんなに見つめられると流石のシエリルも照れるわよ?」

ふわりと微笑めば、大輪の花が咲いたかのように雰囲気や和らぐ。

これが銀河の妖精。ランカがずっと憧れた人。

初めてシエリルの声を聴いたのはいつの頃だったろうか。定かではない。

シエリルがデビューしたと同時にランカはその声に魅せられた。

歌が好きで、歌うことが好きで、特にシエリルの歌う歌は全てに惹かれた。

そんな人が自分と同じ場所に立って、会話している。

それだけでランカにとっては夢の中にいるような気持だった。

「

シエリル、お前今が何時だか——」

ランカの口から何か零れ落ちそうになった時、ちょうどよく大きな門が開かれた。

その中から出てきたのは天才女形の名をほしのままにしているアルトだった。

シエリルはランカの言葉を聞き逃したことに、むっとした表情でアルトを睨む。

「遅いわよ、アタシが訪ねきたんだからもっと早く開けなさい」

「もしくは、もっと遅く」と付け足しそうになった言葉をシエリルは飲み込む。

アルトを見つめるランカの瞳に気づいてしまったからだ。

初対面の相手を見る顔ではない。だが、特別な感情が湧いているものでもない。

それだけでほっとしてしまった自分をシエリルはひたすら隠した。こんなにかっこ悪いところを見せれるわけがない。

「あれ、お前……」

「あの時は、ありがとうございます」

早乙女アルト——天才女形。

しかしランカにとっては「初めて行ったシエリルのライブで出会ったとても綺麗な男の人」という印象が強かった。

目を丸くするアルトに、にこりと微笑むランカ。

シエリルはその二人を面白くなさそうに見つめていた。

*

「ランカをこの家で預かる、なあ？」

「そうよ。アタシだって気は進まないわよ」

ため息をこぼす。

元からアルトの側にランカを置くことにシエリルは反対していた。

まだ短い付き合いだが、ランカの性格は非常に女の子らしい。

アルトのような綺麗な男の側に置きたくない。

同じΩ同士だとわかっていても、シエリルはそう思う自分がいるのを止められなかった。

「この家なら、番になっているαしかいないし、万一があってもアルトが対処できるでしょ？」

「そりゃ、そうだけだよ……」

目の前で交わされる幼馴染二人の会話をランカは黙って聞いていた。

すらりとした身長に誰もが認める華の顔を持つΩの男性。

そのスペックだけでお似合いの二人だなとランカは思う。

シエリルは言うまでもなく、綺麗でスタイルも抜群だ。

アルトはそのシエリルを越える身長と、隣になって映える容姿をしていた。

ランカは知らず知らずの内、じつと観察するように二人を眺めてし

まっていた。

自分のことを相談されているはずなのに、その内容より二人の関係が気になってしまう。

どうしようもなく黒い何かがランカの胸の内燃えていた。

「あの、」

「なに、ランカちゃん？」

「私、ご迷惑なら施設に戻ります」

シエリルの目が大きく見開かれる。

ランカが施設を出てきた経緯は事務所に説明してある。

ランカ自身がああ鳥かごのような環境を好いていないこともシエリルはわかっているに違いない。

だからこそ一番最初に出るはずの「施設に戻す」という考えが出てこないのだと、ランカは思ったのだ。

「ダメよ、あなたはアタシの……ライバルになるかもしれない存在なんだから」

シエリルはランカの発言に唇を固く結んだ。

「運命なんだから」などと言うことはできない。

シエリルにしても、ランカを施設に戻してしまう選択肢を考えたことはある。

それでもそれを提案しなかった——できなかったのは、ただ単にシエリルの我儘だった。

ランカを施設に戻してしまった場合、事務所を辞めることになる。歌うことを何よりも楽しんでるランカが歌えなくなるだろう。

シエリルはランカの歌への情熱に誰よりも共感できる。

だからこそ、安全だと分かっている「死んでいる」状態へと彼女を閉じ込めたくなかったのだ。

そして、自由に会うこともできなくなる。αであるシエリルであれば尚更だった。

「でも、この状況じゃ歌も歌えませんし」

「——っ」

真つすぐな目線、色、輝き。

そこに込められたものにシエリルは見覚えがあった。

シエリル自身の中に大切に仕舞われている歌への執着。

歌が生命であり、祈りであり、魔法である。

そういう人生を選んでいる姿だ。

シエリルには痛いほどわかる。

歌われることを止められる辛さ。

歌わずに生きろというのは不可能なのだ。

少なくともシエリル達にとっては。

「歌は、死なない……止まない、なくならない」

どうにか言葉を紡いだ。

歌を歌えないことはシエリル達にとって死ぬことと近い。

誰よりもその感覚を分かち合えているからこそ、そう言うのが辛かった。

歌は死なない——歌はずっと体の中を流れている。

歌は止まない——歌はずっと作り出され続ける。

歌はなくならない——なくならないものは、いつか溢れる。

川と同じだ。

吐き出さず貯めておけば、いつか必ず溢れる。

シエリルにとって歌をつくる、歌うことは生きることそのものだった。

「必ず、歌えるようになる。あたしはあなたの歌が好きよ」

諦めないで、とシエリルはそっとランカの頬に触れた。

涙も零さない赤い瞳。

その下で確かにランカが泣いている気がシエリルにはしたのだ。

「シエリルさん」

感激に潤んだ瞳がシエリルを見上げる。

言葉にならない感情をどうやって伝えればいいのかだろう。

感謝とも尊敬とも言えない、熱い気持ちでランカの胸を駆け巡る。

この想いを伝えるためには歌うしかない。

歌でしか伝えられない、歌うことで繋がることができる。

そういう側面がシエリルとランカの二人にはあった。

「……お前ら、ここがどこかわかってるか？」

二人だけの世界に声を落としたのはこの部屋の持ち主であるアルトだった。

アルトとしても、二人の雰囲気壊すのは大変申し訳なく思っている。

しかし夜も近い時間に急な訪問を受け、そのまま蚊帳の外に出されたのでは割に合わない。

アルト自身もずっと幼馴染の色恋に巻き込まれていられるほど暇ではなかった。

つまり、アルトはこの時結構イライラしていた。

「ご、ごめんなさいっ。アルトくんの家なのにー！」

シエリル以外の存在を思い出したのだろう。

ランカは感情のまま緑の髪の毛を逆立たてると、慌ててシエリルから視線をそらし、真っ赤な顔でアルトへと頭を下げた。

純粹に忘れていただけの少女を本気で怒るほどアルトは人でなしでない。

ランカの事情も幼馴染を通して知っていたのだから尚更だ。

「アルト……い！」

ランカとは逆に、シエリルは謝りもせず邪魔された怒りそのままにアルトを睨みつけた。

ここが何処だろうと関係ない。

折角、ランカが自分を意識してくれそうだったのに、と唇を噛む。

とはいえ、冷静な理性の部分はアルトの言い分を認めており、何よりランカの前では格好つけたいシエリルがそれ以上アルトを睨むのは無理な話だった。

「ランカを預かるのは……まあ、仕方ない。引き受ける」

がしがしと頭を掻きながら、言葉が続ける。

シエリルは一度言い出したら聞かない性格だし、同じΩであるアルトにはランカの状態が非常に危険なのがわかっていた。

ファーストヒート前なのに人を引きつけ襲われるほどのフェロモンを放ってしまうのは不幸としか言いようがない。

「でもっ」

「いいんだよ、ランカ。さっきのでわかったら？」

納得がいかない表情で詰め寄るランカにアルトは小さく頭を振る。自分たちにはどうにもならないのだ。

ランカはアルトの事情を気にして施設に帰ると言っている。

シエリルはランカを返したくなくてアルトの家にいると言っている。

そのアルトはシエリルが言い出したら、もう止められないことを十分理解していた。

「銀河の妖精さん」がランカを返したくないって言ってるんだから諦めるしかないんだぜ、俺らは」

未だ拗ねた表情を浮かべる「銀河の妖精」の幼馴染をアルトは親指で指差した。

ランカも釣られたように視線をシエリルへ向け、表情を崩す。

二人の視線を集めたシエリルは一人だけ「不満げ」に頷いていた。

「アルトもこう言っているし、いいじゃない。ランカちゃん」

「無駄に広い家だし、ここが一番安全なのも間違いないしな」

シエリルに詰め寄られ、アルトにも承諾される。

二人に押されるような形で、ランカはついに折れた。

「すみません。よろしくお願いしますー！」

ランカの頭を下げる姿を見て、シエリルはやつと嬉しそうに微笑んだのだった。

見えないと思つて緩んだ頬はまさに恋する乙女そのもので。

幼馴染の普段とは違う様子に、アルトは一人苦笑するしかなかった。

#7 end

#8

喉が渇く。

本能が求める何かが訴える。

手を伸ばせ、受け入れろ、渇きを満たせ。

その衝動を体の奥底に封じ込める。

そうしなければ自分の一番欲しいものは手に入らない。

ずっと、そうやって生きてきた。

#8

ランカは自分の安いアパートとは似ても似つかない立派な天井を見つめていた。

目覚めは良い方だったが、抑制剤を増量したせいか、この頃は体を重く感じることも多い。

ゆっくりと体を起こし布団を畳む。それから縁側へと出て全身に太陽の光を浴びた。

ランカの心とはまるで正反対の晴天がそこには広がっていた。

歌いたい、と叫ぶ心を押しとどめ目を閉じる。瞼に浮かぶのは昔から変わらない眩しい人だ。

シエリルの名前を呼びそうになって慌てて瞼を開ける。ドキんと心臓が一つ跳ねた。

アルトの家に居候させてもらうようになって3週間が過ぎた。

ランカが襲われたことは伏せられているものの、ほとぼりが冷めるまで休養期間ということになっている。

広い和室には布団以外にランカの私物がほんの少しだけ置かれていた。

それ以外にシエリルから毎回手渡されるお土産やプレゼントが私物とは別に陳列されていた。

休養中のランカと違いシエリルは「銀河の歌姫」として多くの仕事をこなしている。

たまにしか会うことはできないが、そのたびにランカのことを気遣って色々なものを持ってきてくれる。

満面の笑顔で機嫌よく持つてきてくれたり、照れくさそうに渡してくれたり、画面の向こうでは知ることのできなかつた表情をランカはたくさん知ることができた。

そう思うだけで、どこか心がむず痒くなる。

ただ、本当にこんなことを思ってしまうのが申し訳ないとランカは思っているのだが――少しだけ、落ち着かなくなる。

それが何かランカにはまだわからなかつた。わかりたくないと思つてしまつていた。

「おはよう、ランカ。調子はどうだ？」

「おはよう、アルトくん。うん、大分、いいみたい」

縁側にぼうつと立つていたランカに声がかけられる。

ランカに声をかける人など、この家では決まつていた。

ゆつくりと目を開けて声のした方へ顔を向ければ、相変わらず涼やかな顔が立つていた。

「フェロモンが落ち着けば、また歌えるようになるらしいからな。もう少しだ」

アルトの言葉にランカは苦笑した。

シエリルの幼馴染として紹介されたこの人は不器用だが優しい。

同じΩとして勉強になることも教えてくれる。

ランカとは違い、自分のセカンドベースをしつかりと受け入れ生活しているアルトは眩しかった。

「こんなに不安定なのは初めてだから……はやく、元の生活に戻りたいな」

あの事件後、ランカのフェロモンは不安定極まりない状態だつた。

歌う歌わないに関わらず、多くなつたり、少なくなつたりと安定しない。

歌えば多くなることだけはつきりしていたので、しばらくは歌うこ

とができない。

それが何よりの苦痛だった。

胸の奥にざわざわとした何かがここしばらくずっと蹲っている。

その不明の何かを解消するためにも、自分の気持ちを音にして歌うことが一番いいとランカは知っていた。

不快とまではいかない。

ただ、落ち着かない何かがランカの意識をはやし立てる。

「ランカも歌うことが大好きなんだな」

「歌ってる時が一番落ち着くし、楽しいから」

物心からいた施設での監獄のような環境も歌が歌えるなら我慢できた。

歌えなくても、シエリルの音楽を聴ければ苦しさを忘れられた。

歌と音楽はランカの人生で切り離せないものに違いなかった。

「そうか」

「でも、今はもう一つ楽しいことがあるの」

ずっとそうやって生きていくと思っていた。

歌を歌って、聞いて、Ωという性を抑制して、そうやって生きていくのだと。

だが本物の歌姫と出会って、一緒に働けるようになって、ランカは気づいてしまった。

歌を作る楽しさと歌を聴いてもらえる喜びを知ってしまった。

「シエリルさんみたいに、歌を作ったりしてみたいなって」

「あいつみたいに？」

「シエリルさんって凄いだよー！」

ランカの赤い瞳がまるで宝石のように光を放つ。

常に感情豊かな少女ではあるが、シエリルのことになると特段様子が違う。

感情に合わせて上下する緑の髪はいつそ鮮やかにアルトの目には映った。

シエリルのことを話す時、ランカは一番輝いている。

初対面だったシエリルのライブの時からアルトはそれを感じてい

た。

(ただ、ランカがそれを自覚していないのが問題か)

シエリルが運命の番を見つけたと聞いた時、ランカのような反応をしていたのをアルトは見ていた。

その類似性からしてランカがシエリルを特別に好いていることはわかる。

だが、この幼いΩの女の子はまだその感情が懂れなのか、何なのかわかっていない。

否応なくヒート前からΩという性と向かい合わなければならなかったアルトとは全く違う。

セカンドバース関係なしに人を好きになれることは、この世の中では酷く貴重なことに思えた。

それが少しだけ羨ましい気もしたが、今はただ幼馴染が不憫でならなかった。

「お前ら、本当に似た者同士だな」

「ええっ？ 私とシエリルさんは全然違うよ」

「いや、その”歌が全て”ってところがそっくりだ」

驚きに目を見開くランカの顔をアルトは苦笑しながら見つめた。

ランカがアルトの家に滞在するようになってからしばらく経つ。

その間、ランカとシエリルのやり取りをアルトは傍で見てきた。

互いが互いを大切にしすぎて、いつそもどかしい。

「私ね、シエリルさんの歌が大好きなの」

ランカは小さく微笑んだ。

シエリルの幼馴染であるアルトにこういうことを言うのは少し恥ずかしい。

だがシエリルが仕事でおらず、彼女の話ができる相手が限られたこの場では想いが零れてしまっても仕方ないだろう。

小さく息を吸って、吐いて、ランカは真つすぐ前を見つめた。

「力強くて、ドキドキして、聞いているだけで元気になれる。だけど

……」

シエリルの歌はいつ聞いても特別だった。

輝く才能が溢れていて、どんな時でもランカの一番明るい場所に
あつたのだ。

その理由を考えたことなどない。ただずっとシエリルの歌を聴い
ていて、ランカには伝わる感情があつた。

「いつもどこか寂しくて、隣に誰かいて欲しいって探してて。私と似
てるかも、なんて思っちゃつたの」

ランカがシエリルの歌に惹かれた理由。

それは綺麗な歌声であつたり、力強いメロディだったり、きらめく
歌詞だったり、そういうものだ。

その中でも一等を上げるとすれば、力強く歌っているはずの彼女か
ら垣間見える、何かを求める寂しさだった。

小さい頃はそこまで明確に感じ取っていたわけではない。

シエリルの歌っている姿を見てみると、どこかもの悲しさを感じ、
それが苛立ちだったり、輝きだったりに変換されているのがシエリ
ル・ノームという歌姫のように見えた。

それが何の因果か、ランカはシエリルと出会ってしまった。実際に
言葉を交わし、姿を見た。

ランカから見たシエリルはやはり一番輝いていて、それでいて誰も
隣に立てない存在だった。

幼馴染であるアルトであつても隣に立っているわけではない。

(こりゃ、びっくりだな)

ランカの言葉を聞いて、アルトは肩をすくめるしかできなかった。

仕事柄よく手入れをしている髪の毛を指で触る。するりとした感
触が逃げていった。

彼女はまだ気づいていないようだが、その理解は幼馴染のアルトか
らしてもほとんど“当たり前”だった。

シエリルとアルトが知り合つたのはお互いが10になろうと言う
ときだっただろうか。

αとΩお違いはあれど同じ芸の世界に身を置く同士、存在は知って
いた。

初めて会つたその日からシエリルはいつだってシエリルだった。

姿形が変わっても、大人っぽく成長しても、その中身は子供の頃から変わっていない。

——寂しがり屋で意地っ張りで、そのくせ誰かを探している。

アルトが何年もの月日をかけてたどり着いた幼馴染の性格にランカは歌だけで気づけたというのだ。

「ほんつとに、シエリルが好きなんだな」

「うん、大好き！」

ニッコリと笑う顔はまるで向日葵の花が咲いたようだ。

シエリルが見ていたら、また嫉妬されてしまう。

無邪気に笑顔を振りまくヒート前の少女にアルトは苦笑した。

シエリルは意地っ張りだ。自分だけランカに惚れたなど絶対に認めようとはしない。

しかし彼女に近い人には甲斐甲斐しい様子からランカに惚れていることは丸わかりなのだ。

この二人の距離が縮まるのがいつになるのか、天才と言われたアルトにも皆目見当がつかなかった。

*

「ランカちゃん！」

「シエリルさん！」

聞こえてきた声にランカは光速で振り向いた。

3 mもない、その距離にずっと頭を占めていた人がいる。

それだけで嬉しくて、ランカは胸を弾ませた。ドキドキが、頭と体を満たし、一杯にする。

シエリルを前にするとそわそわしてしまう。

憧れだったり、緊張だったり、好意だったり、色々なものが混ざったそれにランカは落ち着かなくなってしまうのだ。

(ああ、シエリルさんだ)

ふわりと漂うフレグランスは彼女がお気に入りものだ。

鼻のいいランカはこの匂いを一際気に入っていた。

シエリルがこれをつけるときは大抵仕事が入っていないときだ。

ゆるりと頬が緩む。するとそれに気づいたシエリルがランカの頬

を無造作に引つ張った。

強く、それでいて優しい指使い。

「なんて緩んだ顔してるのよ、そんなに嬉しい？」

「はい、うれしいですよ！」

即答したランカに、シエリルは面食らったように表情を固まらせた。

そんなに素直に認められるとは思っていなかったのだ。

自分とは正反対の性格を持つ運命の人に、シエリルはたまに太刀打ちできない。

「そ、そう、ありがとう」

目を泳がせながら言葉を紡ぐシエリルをランカはひたすらに見つめていた。

シエリルが触る場所がじんわりと暖かい。

伝わってくる温もりが心地よくて、幸せな気分になる。

ちよつとした指先の動きでさえ今のランカなら感じ取ることができらるだろう。

「シエリルさんの手って魔法の手ですね」

「え？」

「歌詞も書けるし——こうやって触ってもらえるだけで嬉しくなっちゃいます」

ぼつと火がついたように赤くなるシエリルの顔をランカが愛おしいと思いはじめるまで、あと少し。

運命の時は確かに近づいてきているのだ。

end

キラキラ輝く星たちも。
止めどなく溢れる喝采も。

きつと、あなたに比べたら小さいもの。

私の中に一番強く輝いて、焼き付いて離れない存在。

それをきつと「運命」と人は呼ぶ。

#9

ふと目覚めたその瞬間ごとに人間は新しい世界へと生まれ変わっている。

そんなことを書いてあった本をランカは記憶の何処かにとどめていた。

聞こえる音も、降り注ぐ光も変わりはない。

それでもランカの世界は起きた瞬間に世変わっていた。

いつもの何倍も血の巡りが良くなったように思える身体を強く抱きしめる。

身体が餓えている。胸の鼓動がうるさいくらいに響いた。

何かを強く欲している。熱を持ち、上がる息をどうにか整えて、頭を振る。

「しえり、る、さん」

——これは、ヒートだ。

本能が何よりも叫んでいる。ヒートになった人を見たことはあれど、自分になるのは初めてで。

熱に浮かされ、自分を舐めるように見てきた視線を覚えている。

自分があゝの視線を誰かに与えるかと思うと背筋が凍るようだ。

その上で、自分が求めるのは、やはり変わらないたった一人。

浮かぶキラキラとした一人の姿にランカの心はじんわりと暖かくなる。

そのことが少しだけ誇らしいような悲しいような気持ちになって、ランカの意識は闇に途切れた。

— p r r r r

移動中の車内に鳴り響く電話。

そこに表示された名前を見た瞬間に、シエリルは耳に端末を寄せていた。

今日は仕事であつてもどこか落ち着かなかつた。

アルトのところにランカを預ける切っ掛けになつた事件のときのように。

シエリルはその感覚が嫌で、だけど、どこか待ち望んでいた自分も隠せず苛立っていた。

「はあい、アルト。どうしたの?」

十中八九、ランカのことだろう。

脳裏をよぎる緑の髪と美しい赤い瞳を思い出す。

アルトへの電話の声を明るくしたのは意地のようなものだった。

シエリルはセカンドベースと真っ向から対立している。

自分の人生を自分以外の何かに決められるのが、ずっと、生まれてから嫌だつたからだ。

歌でもインタビューでも変わらず、そう発言してきた。

そんな自分が運命の番に会い、揺らいでいるのが許せなかつた。

『ランカのファーストが来た』

「……そう」

予想通りの言葉にシエリルは声を少し低くした。

ついに来たかと、背もたれにもたれ掛かる。

優しい感触が背中越しに伝わる。

深呼吸しても早まりだした鼓動は落ち着きそうになかつた。

『今、Ω以外は立入禁止にしてある』

「βも?」

『一応な』

「すぐ、行くわ」

目の前には車の天井が広がる。

なんてことない、いつもの色だった。

なんてことない日常の続きが、初めての経験で覆されそうとしてい

る。

これから向かうアルトの家でシエリルは間違いなく何かを選び取る。

期待していた、恐れていた瞬間だった。シエリルは瞳を一度閉じ、自分を見つめ直す。

きっと、今から行く場所でシエリルはセカンドバースと真つ向から戦うことになる。

それはランカを「運命の番」と認識してから、いつか来るとわかつていた瞬間だった。

『……ランカ、ずつとお前の名前を呼んでるぞ』

耳の奥に残るランカの声。

自分と呼ぶ声。

そして、誰よりも響いた歌声。

「わかってるわよ、だって、あの子は——」

——アタシの運命なんだから。

そう答えて、すぐに通話を切る。

ふうと小さく息を吐いてから、窓の外を見つめた。

ランカのことを思えばもつと熱くなっても良いはずだが、心は不思議と風いでいた。

ずっと待ち望んでいたのか、それとも来ないで欲しかったのか。

今でもシエリルにはわからない。

欲を言えば、お互いに運命の番だと納得してからファーストヒートを迎えたかった。

ランカが自分を好いてくれているのはわかる。この間なんて、思わず襲いそうになったほどだ。

しかし時間は待つてくれない。

両思いになる、というシエリルの願いは叶わぬまま、ランカを手に入れることになる。

それが怖かった。

「だから、セカンドバースなんて嫌いよ」

ぽつんとつぶやいたシエリルの言葉をグレイスだけが聞いていた。

想いを伝えあつて、それから絆を結ぶ。

自然な流れがセカンドベースには全く適応されない。

強い本能がシエリルの大切にする感情を洗い流すようで嫌だった。

「グレイス、今から明日にかけての仕事はキャンセルしてちょうだい」
電話の内容を理解しているのに微動だにしないマネージャーに声をかける。

残る仕事はインタビューと撮影。

どうしても今日じゃないと駄目なものはなかったはずだ。

「この借りは高いわよ？」

「銀河の歌姫に運命の番ができるんだから、お釣りが来るでしょ」

「そう、そうね。そう思うことにするわ」

グレイスはうつつすらと唇を引き上げた。

その朱さが今のシエリルには印象的だった。

いや、この夜の全てが印象的になるのだと思った。

*

通い慣れた正面の門へと車を横付けにする。

アルトの家はいつもとは違う物々しさに溢れていた。

閑静な住宅街にふさわしくない人数の警備員が配置されている。

シエリルは車から飛び降りるような勢いで扉を閉めると、玄関のすぐそばに立っていたアルトと合流する。

「どうなの？」

アルトと2人並んで長い板張りの廊下を歩きだす。

急ぐ歩調に合わせて、ピンクブロンドの髪の毛がふわふわと揺れた。

それがシエリルの本能を急かすように感じられた。心が追いつかなくても、身体は着々と準備を始めている。

燐光を放つような艶やかな髪をランカは好いていて、よく「触らせてください」と頼まれた。

「最初はまだ呼びかけると返事をしたんだが、今はもう無理だ」

「アタシ以外、触れてないでしょうね」

足を進めるほど甘い匂いが強くなる。

まるで虫が蜜に引き寄せられるように、シエリルの鼓動も高鳴った。いつかの事件のときも嗅いだ匂い。それをさらに強くしたような劇薬だった。

玄関からランカの部屋に近づくほどに芳醇な甘い香りがシエリルの鼻をかすめていた。

まるで酒に酔うかのように、頭がクラクラしてきそうな刺激的な匂い。

以前にも嗅いだこの匂いをシエリルは決して忘れていない。

「βさえ怖くて近づけてないっつーの」

「それは上々だわ。あと一晩よろしくね」

もしランカの側に誰かいるとしたら、想像しただけで吐き気がした。

αとしての本能が、自分の番の側に誰かを近寄らせることを拒絶する。

シエリルから言い渡された言葉に、アルトは面倒くさそうに頭を掻く。

それからにつこりと笑うシエリルを見た。

「まあ、大丈夫だとは思うが、優しくしてやれよ」

アルトが足を止める。

シエリルはそのまま進んだ。

離れる距離を紡ぐような優しい言葉に、シエリルは首だけ振り返る。

「大切にするわよ。アタシの運命なんだから」

アルトに言われるまでもない。おまけにウイंकを一つサービスして、あとは振り返らない。

シエリルは心を落ち着かせるために深呼吸して、それからそつと運命へ手を伸ばした。

ずつとずつと認めなかったものが、今、目の前にある。

そう考えるとなんだか不思議な気がしてならなかった。

「…っ…、しえ、りる、さん」

月明かりが差し込むだけの暗い部屋。

そんな中でもランカの姿はすぐにシエリルの瞳へと飛び込んできた。

まるで彼女自身が光を発しているかのように、濡れた赤い宝石がシエリルを射つ。

「ランカちゃん、とっても扇情的な姿でお迎えありがとう」

いつもとは違う色つぼさがαとしての本能を掻き立てる。

シエリルと会おうと大きく動いて嬉しそうにしていた緑の髪も今は頼りなさげに沈んでいる。

白い頬は赤く染まり、伝う汗がまるで甘露のようにシエリルには写った。

赤い瞳はいつもの澆刺とした光ではなく、蠱惑的な色をしている。同じ宝石のような美しさなのに、今は何もかも飲み込んでしまいうな紅だった。

(これは、すごいわね)

ランカと目があつた瞬間に、シエリルはフェロモンに襲われた。シエリルの自意識を全て持っていきそうなほどのαとしての欲。

目の前の存在を手に入れて、食べてしまいたいという本能が引きずり出される。

背筋を這い上がる快感を抑えることもできない。いや、抑えることさえしたくなかった。

「しえりる、さん。私、からだ、あつい……です」

月明かりに浮かぶ運命にシエリルは一歩ずつ足を進めた。

ランカが言葉を発するたびに、甘い匂いが強くなっているように思えた。

耳に届く声が、シエリルの本能を掻き立てる。

——近づけ、襲え、食え。

——優しく、丁寧に、怖がらせずに。

相反する気持ち天秤を不安定に揺らす。

それでも、目の前の彼女から逃げる気は少しもしなかった。

「そう、ね。アタシも、よ」

「しえりるさんが、欲しくて、仕方ないん、です」

「……そう」

そつと震える手でランカの顔に触れる。溢れ出した熱が彼女の体温をかなり高いものにしていった。

今すぐにも襲いたかった。番にするために、彼女の薄紅色に上気したうなじへ噛み付いてしまった。

セカンドバース、さらにいえば α としての抗いがたい欲求。

押しとどめたのは、ランカのヒートでありながら、シエリルだけを見つめる真摯な瞳だった。

「 Ω は α と反対の性だ。

奪うのが α だとしたら、誘うのが Ω 。

その考えのせいで、 Ω は襲われるものであるのに、差別されてきた。ここで何も考えず、名前も呼ばれず、ただ欲しがられたら。

運命など何も気にせず、ただの α として Ω を食ってしてしまったかもしれない。

「シエリルさんを、私に、くれますかっ?」

そんな Ω であるはずのランカの一言は魔法のようだった。

奪われるはずの Ω が、 α であるシエリルを「くれ」という。

そんな風に求められたことのないシエリルはその言葉を聞いた瞬間に、一瞬で落ちて、一瞬で舞い上がった。

今までは α の本能だけが Ω のフェロモンによって高ぶっていた。

それなのに一瞬で本能が落ちつき、シエリル自身の気持ちを巻き込んでもつと高くへと飛び立った。

(ありがとう、ランカちゃん)

そつとぎゅつとランカを抱きしめる。顎の下に来た緑の髪がただひたすら愛しい。

セカンドバースを超えることはシエリル一人には難しかった。 α としての特徴を色濃く持つせいもある。

それをランカはたった一言で、本能を恋情へ、下手したらもつと大きなものへと変えてくれた。

シエリルはカメラの前では絶対にしない、くしゃくしゃの顔で笑っ

た。

その瞳から涙が溢れていることにシエリル自身も気づいていない。この世界で一番綺麗な涙を見れたのは、たった一人ランカだけだった。

「いいわよ、あげる。アタシの初めて、ランカちゃんにあげるわ」

「……うれしい、ですっ」

ふわりと微笑む姿に今までで一番大きく意識が揺さぶられる。

段階的に強くなるフェロモンに意識が飛びそうだった。

さつきまで怖かった。もう今のシエリルにとって、それは怖いことではない。

「あなたを番にする」

「え……」

不思議そうな瞳でシエリルを見上げるランカ。

その額に誓うように優しくキスをする。

ぎゅっと掴まれた腕の熱さが愛おしかった。

本能が求める関係なんてロクなことがないと思っていた。

全て自分で選んで、全て自分で掴み取りたかった。

それができないセカンドバースを嫌った。

「返事はしなくていいわ。だって、アタシはシエリルだもの」

今は感謝しても良い。

シエリルにこれ以上ないほど運命を信じさせてくれた。

ランカと引き合わせてくれた。それだけで十分だった。

「はい」

ランカの瞳から一筋の涙が溢れる。

それが番となれる幸福からなのかは、ランカしかわからないことだった。

end

#10

朝が来た。

昨日までとはまるで違う朝。

部屋の中はまるで甘ったるい匂いがそこかしこに残っていて。

それでも少しも不快ではない。

なぜなら、ついにずっと探していたものを見つけたからだだった。

#10

しっかりとランカが意識を取り戻したのは、熱に意識を奪われてから一日と少し経ってからだった。

大分聞き慣れてきた朝の喧騒がランカの耳を打った。

立派な日本庭園を持つアルトの家では、毎朝鳥たちがランカを起こしてから人が動き出す。

「ん……」

今日はいつもよりずっと日が高いのに、とても静かだった。

その違和感に、幸せにまどろんでいた意識が浮上する。

すごく柔らかくて、安心できる何かがランカをぎゅっと包み込んでくれたいる。

緩やかに頬を寄せつつ、伝わってくる体温を感じた。

「……ん？」

大きく息を吸い込めば大好きな匂いがランカの鼻腔いっぱい広がる。

これは、間違えるわけもないシエリルの匂いだ。

朝から彼女のことを感じられるなんて幸せ、とランカは夢心地のまま瞳を開いて。

そのまま、一瞬、停止した。

「シエリル、さん」

かすれた声がこぼれ落ちた。

ランカの布団にかろうじて収まっているのは銀河の歌姫その人である。

まるで、子供のような幼い顔で、ランカを腕に包み込んでぐっすり眠っている。

美しい人は寝顔まで美しい。

ランカは画面越しでも見たことが事がないくらい近くにある彼女の顔をしばらく呆けたように見つめてしまった。

きめ細やかな肌に、すつと通った鼻筋。

今は隠されている瞼の向こう側にはまるで空のような深い青が隠されている。

それを祝福するようにピンクブロンドの髪が顔を囲み、ランカの緑の髪との色の違いをはつきりとさせた。

「なん……っ！」

見とれていたランカの脳裏に昨日の記憶がよみがえる。

ボヒュンと音がしそうな勢いで自分の顔に熱が上がっていくのをランカは感じた。

昨日、ランカはヒートを迎えた。

それからはずっと夢の中を歩いているような心地だったが、シエリルが現れてからのことは覚えている。

ヒート状態に入ったΩは記憶が薄いと言われる。だからこそ、襲った誘ったの争いになる。

しかし、ランカは思いの外はつきりとシエリルとのことを覚えていた。

それが運命の番だからなのかは神のみぞ知ることだった。

「シエリルさん」

まだ、声を出すには辛い。

意識をしてみれば全身のあちこちに感じたことがない倦怠感があつた。

何よりランカは覚えている。

シエリルが自分のうなじを噛んだことを。

そして、それがセカンドバースとずっと戦っていたシエリルにとつ

てどういう意味を持っているかを考えてしまった。

「ランカちゃんは、朝から忙しいのね」

腕の中に包み込まれるような距離は変わらない。

目の前で先程まで隠れていたサファイアの瞳が輝きだして、ランカは顔に熱がこもる。

昨日はこの青がひどく熱に浮かされて自分を見ていたのを知っている。

今優しく抱きとめてくれた腕が、どれだけ力強く動いたかも知っている。

その上で優しくかったのだから、ランカとしてはたまらない。

——歌うことを最上としているランカでさえ、ずっと夜のまま留まってしまったかった。

そう、思えてしまうくらいの幸福感が番になった後の交わりにはあった。

「お、おはよう……ごきい、ます」

「ええ、おはよう。思ったより元気そうで安心したわ」

甘く響く声が麗しい。

自分の耳元で響く声に酔いしれてしまいそうだった。

昨夜の近さを覚えているのに、覚えているからこそ、ランカは目の前で輝く星にクラクラとした。

星の輝きは遠くで見ているればキラキラと煌くだけだが、身近で見ると当てられてしまう。

「シエリルさんが、優しいから」

「あら、過分な褒め言葉ね」

どうにか絞り出した一言は、そんな可愛くもなんともない言葉になっちゃった。

セカンドバースの、更に言えば、αの発情の怖さをよく知るランカにとって、発情しているも優しいということとは凄いことだ。

本能の熱に浮かされた状態でも、シエリルはランカに優しくかった。

それは痛みが少しもない身体が証明している。

少し顔を上げれば、昨日とはまた違う、変わらず麗しい顔がランカ

を見つめ続けている。

それだけでフラッシュバックのように様々なこと思い出してしまっただけ。

嬉しさと恥ずかしさが交互に襲い、その終局点でランカはいらない事実にも気づいてしまった。

——セカンドベースと戦っていたシエリルはランカを番にしたことで、セカンドベースに負けてことになってしまっているのではないかと、少なくとも、世間はそう思ってしまうのではないかと。

銀河が注目する歌姫だ。あらゆる批判が集まることは目に見えていた。

「でも、良かったんですか？」

「……ん？」

大きく吸って、吐いて、どうにかランカは言葉を紡いだ。

ランカは自分自身の性を知っている。セカンドベースを理解している。

その中でも非常に強力なΩとして、長年扱われていたのだから。

「わたしが、番で」

言った瞬間に泣きそうになった。

シエリルの番になれたことは死ぬほど嬉しい。

何より、ファーストヒートを迎えた瞬間、頭の中は彼女のことしか思い描かなくなった。

全てがシエリルで、シエリルが全てだった。

彼女の艶やかな唇が首筋をなぞり、噛まれた瞬間にランカはなくなっていたもの全てを手に入れたのだ。

「嫌だったの？」

「違いますっ、そんなことは絶対にないです」

ランカの言葉にシエリルは少しだけ目を細めた。

不機嫌さで隠そうとしても、その下に見えるのは、ランカがたまに感じていた孤独だ。

——寂しい人。いつだかアルトにもそう話したことがある。

シエリルはその内側に人知れない寂しさを持っている人間なのだ。

番を手に入れたことで、それが満たされたかは彼女にしかわからない。

ランカは少しでも寂しさを満たせる存在であればよかった。

「……でも」

シエリルのセカンドバースの受け止め方を知っている。

そんなシエリルが自ら番を作るなんて、ランカには信じられなかった。

自分の、人より強いフェロモンが彼女に無理を強いたのではないかと怖くなってしまう。

それはきつと何よりも罪深いことだ。

一度そう思ってしまうと、考えが止まらなくなり、思わず目を伏せる。

「ねえ、ランカちゃん」

「はい」

そんなランカの耳に優しい声が降ってくる。

少しだけ色を濃くした緑の髪を柔らかな指先が通り抜け、その仕草一つでも愛されているのが伝わる。

心はこれ以上無いほど喜び、高ぶっているのに、シエリルを傷つけたかもしれないと思うだけで怖くなる。

シエリルの全てに憧れていた。

シエリルの生き方が好きだった。

セカンドバースと戦う背中を追いかけていた。

人生の目標にしていた人を、くだらぬ横道に連れ込んでしまったのかもしれない。

「シエリル・ノームは流されて番を作る人間？」

「そんなこと、ないです」

シエリルの言葉にランカは小さく、それでもしつかりとか否定した。

ランカの知るシエリル・ノームは、何よりも誰よりも自分で選ぶことを大切にしていた。

プロデュースも自分の納得いくまで拘る。

自分の歌が一番良く見える魅せ方を彼女はずっと追い求めていた。それがランカの知る『シエリル』で、だからこそ、たまに見え隠れする寂しさが酷く気になったのだ。

「そうよね。アタシはシエリルよ……自分の運命は自分で切り開くもの」

「いつも、そう言ってきた」と呟くようにシエリルが口にする。

そこに含まれた感情に思わずランカは顔を上げた。

シミひとつない抜けるような美しい肩やデコルテに、輝くような金糸が舞う。

シエリルだった。ランカが研究所の中から、ずっと焦がれていた『シエリル・ノーム』がそこにはいた。

「アタシは、アタシが欲しいものを手に入れる」

真つ直ぐにランカを見下ろす視線は、まるで女神のようだった。

きつと神様から天啓を受けた人間はこうなるのだろう。

動けない。離せない。

こんなにも魅力的な人間がいるなんて信じられない。

それでもシエリルは人間で、だからこそランカは思わずその頬に手を伸ばしてしまう。

「そんなアタシでも、ランカちゃんだけは不安だった」

「え？」

そつとなぞつた頬の下は濡れていなかった。

ランカにはまるでそこを透明な雫が通ったように見えた。

僅かに弱くなった声音に、顔を少しだけ近づける。

シエリルが困ったように笑った。そつと手が重ねられて、指先に彼女の唇が触れる。

「だって、アタシは見た瞬間、聞いた瞬間にわかったもの」

「そうなん、ですか？」

ランカとシエリルがきちんと対面したのは事務所が最初だ。

もちろん、それまでも画面越しであればランカ穴を開けられるほどシエリルの顔を見ている。

生で見たのはライブの時が初めてで、ライブも生のシエリルもドキ

ドキした。

勢いで出たオーディションに受かって、事務所で会った時だって、いつでもランカはドキドキしていた。

シエリルと会うだけで幸せだったし、歌と一緒に歌えるかと思うとワクワクどころの話ではなかった。

つまり、ランカはシエリルと一緒にあればいつでも驚くほど幸せだったのだ。

それが運命などと考える前に、本能が理解してしまっていた。

残念なことに、ランカ自身はそれを今でも理解してはいないが。

「ええ、悔しくて……でも、嬉しくて」

ぎゅっと繋がった手から体温が移り始める。

負けず嫌いのシエリルらしい言い方に、ランカは表情が緩むのを感じた。

自分が何を言っているか理解し始めたシエリルの頬が少しずつ赤く染まり、青い瞳が左右に泳ぎ出す。

それから観念したかのように、ランカにとって一番嬉しい言葉をくれた。

「あなたの歌は、誰よりも心地いい」

「それはわたしのセリフです！」

勢い余ってシエリルの胸に飛び込むような形になった。

シエリルの歌が誰よりも好きだった。

いつか隣で歌いたいと、思い始めたのは事務所で出会ってからだった。

それでもシエリルが特別なことに少しも変化はない。

「ね、アタシはきちんと選んだわ。あなたはアタシを選んでくれる?」
ぎゅっと包み込まれる腕の暖かさが幸せだった。

シエリルの腕の中から見上げた瞳は今まで見た中で一番彼女に近寄れた。

その瞳に弱さを見た。孤独を見た。

ランカはシエリルの歌の奥底に流れていた寂しさの塊を感じた。

「もちろん……わたしで良ければ」

「ランカちゃんが良いのよ。って、もう番にしちゃったから、離さないけどね」

ふんわりと微笑むシェリルを忘れることはない。

きつとこれから先も、ランカはずっとこの瞬間を覚えているだろう。

彼女の強さも優しさも。

彼女の弱さも寂しさも。

何もかも見せてくれたことが、ランカにとってこれ以上無いほど嬉しかったのだから。

end